

## 『神戸新聞の 100 日』を読む

角川文庫刊『神戸新聞の 100 日』を一気に読んだ。震災の年、1995 年 11 月に刊行された単行本を文庫化したものである。冒頭に神戸市在住の作家陳舜臣さんの「神戸よ」と題した寄稿文が載る。これは震災から 1 週間後の 1 月 24 日朝刊に掲載された。「我が愛する神戸のまちが、潰滅に瀕するのを、私は不幸にして三たび、この目を見た。水害、戦災、そしてこのたびの地震である。大地が揺らぐという、激しい地震が、三つの災厄のなかで最も衝撃的であった。私たちは、ほとんど茫然自失のなかにいる。」

写真は神戸市長田区役所の 7 階ギャラリーに展示されている「1 月 17 日午前 5 時 46 分」で止まった時計である。阪神・淡路大震災の激震は、神戸新聞本社を新聞発行が不能な状況に陥れた。本書は大災害のなか、神戸新聞社が社員一丸となり、新聞を発行し続けた 100 日を描いた感動のノンフィクションである。



「新聞人が新聞をつくれぬほど辛いことはない。」神戸新聞と京都新聞の間には、緊急事態発生時の新聞発行援助協定が結ばれており、京都新聞の全面協力のもとに新聞を発行する。震災当日「近畿で大地震」の大マク見出しの夕刊が被災の街に届けられた。

「未曾有の災害を目の前にして、新聞社がやるべきことは、たった一つしかない。『新聞を出す』ことである。」新聞人の心意気と連帯感に頭が下がる。三宮の神戸新聞会館や国際会館は「戦災復興のシンボル」であったが、それらが全壊した。震災 1 ヶ月後に三宮・長田を訪れたが、全壊したビル群に愕然とした。神戸市役所の展望ホールから 2 年前に撮った写真のように、22 階建ての神戸国際会館は 99 年にオープンして神戸都心は蘇ったかに見える。



本書は新聞づくりの現場を知るうえでも参考になる。ここ数年、『ジャーナリスト』の新聞「マスコミ評」を書いているので、ひときわ興味深いものがあつた。それと解説で鎌田慧さんが書いているように、本書には新聞記者同士の友情だけでなく、「新聞と読者とがささえあう新聞の原点をたしかめ合う感動がふくまれている。」震災から 15 年にあたる来年 1 月に、本書はドラマ化されるという。ぜひ一読を薦めたい。

(2009 年 12 月 29 日 記)